

黎明期に活躍された方々

日本オペレーションズ・リサーチ学会は、2007年夏に創立50周年を迎えました。この間、多くの方々の多大なご尽力により、ORの研究と実践は飛躍的に進歩し、OR学会も発展を続けてきました。しかし、長年ORの学問領域およびOR学会に貢献されてきた方々の中には、ご逝去された方やご高齢の方も多く、若手の会員にはほとんど知られていない方も少なくありません。そこでOR誌では、これらの方々がORおよびOR学会にどのような貢献をされ、どのような人物であったかを紹介し、これを後世に伝えるために第53巻第1号より連載「ORを築いた人々」において、長年ORに貢献された21名の方々の人となりや氏にまつわるエピソードなどを紹介してきました。この連載を通して、読者の皆様に我々の偉大な先輩を身近に感じていただくことができたとしたら幸いであると考えています。

しかし、今回の連載では企画する時期が既に遅かったため、本来取り上げるべき方でも適当な執筆者が見つからなかったことや、連載の回数に制限があるため致し方なく割愛した方も少なくありません。そこで、今回紹介できなかったOR学会の黎明期とその後20年くらいの間ORの礎を築いた方々の活動を、今月と来月の2回にわたって紹介し、本連載を終えたいと思います。

以下の本文は、当時の記憶を辿るために行われた座談会（出席者：小笠原暁先生、森村英典先生、柳井浩先生、若山邦紘先生、進行役：牧本直樹、山下英明）で話し合われた内容をもとに、主として森村英典先生が執筆されたものです。（OR誌編集委員会）

わが国にORが持ち込まれてから学会が創立されるまでの間のいわば黎明期にも、さまざまな方々がORを理解し、研究し、その有用性に魅せられて普及に努められた。その歴史を端的に知るには「OR事典」[1]の付録B1の「年表」を見るのが良いであろう。1952年に日科技連にOR研究委員会が組織されたこ

とや後藤正夫先生を中心にOR研究グループが発足したことが記されている。OR学会が発足する5年前のことである。もっとも、さらに遡って戦時中の1941年頃や1943年頃に“OR的活動”が行われていたそうで、このことは後藤先生がOR誌に寄稿された「あるORの体験」[2]の中に記されているが、そこにお名前が出た河田龍夫先生は学会創立の中心になられたし、岸道三氏は道路公団のOR活動を推進されただけでなく、後年学会長も務められた。

このような先駆者の方々の内、概ね学会発足以前の黎明期においても活躍され、かつこのシリーズで取り上げていない方について、筆者らの知る限りのお人柄やエピソードをお伝えしたい。

その筆頭は後藤先生であろう。「あるORの体験」の中の記述によると、前記のOR研究グループはMorse-Kimballの本の勉強会であったようで、正に戦後のわが国へのOR導入のきっかけを作られた先達である。当時先生は総理府の統計委員会におられ、政府の統計行政の中心を担っておられた。統計(Statistics)がstateを語源とすることに象徴されるように、統計業務は国際的に国家が関与していて、例えばInternational Statistical Instituteの会合の責任は政府が負っていた。1960年に日本でその国際会議が開かれたとき、皇太子のご臨席の下で開会式が開かれるなどかなり派手なものであったが、その実務の責任者は統計基準局長の後藤先生であった。筆者もこの会議に参加したが、後藤先生は遠くから眺めるだけの存在であった。

1950年代は、生産や経営に役立つ技法を取り入れようとする機運が高まった時期で、QCもORもそれを推進しようとする人々の顔ぶれは同じであった。時間的にはQCが先で、後藤先生も河田先生や森口先生、増山元三郎先生などとご一緒に、日科技連などを足場に、統計や品質管理の普及に努められていた。

その後、大分大学長や参議院議員、法務大臣などを歴任されたが、引退後はOR学会のフェロー会議に毎

年のように出席され、その温顔にふさわしい穏やかな語り口で、ORは実務の上で大変に役立った、と繰り返しお話をされていたのが印象に残っている。上記の「あるORの体験」の最後に「1980年にある重要案件についてORを行ったが、その内容を述べるのは時期尚早」と記されているが、フェロー会議でも同様の話をされていた。遂にその内容をお聞きする機会がなかったのはかえすがえすも残念である。

日本科学技術連盟、略称日科技連は、戦後すぐからQCやORの教育普及に大きな足跡を残した団体であるが、その牽引車となられたのは小柳賢一専務理事である。OR教育コースの創設をはじめ、「オペレーションズ・リサーチ」誌の創刊、OR学会発足の準備と発足直後の事務局引き受けなどに同氏の果たされた功績は大きい。日科技連の創立は戦後すぐのことであったから既に60年余を経過しており、「創立50年史」も刊行されているが、その中で後藤先生は、戦中から戦後にかけての日本のエンジニア団体の様子も含めて、創立のいきさつを対談の形で述べられているし、小柳氏の活躍ぶりもうかがうことができる。

OR研究委員会に名を連ねている方には、後に「実数学」を標榜しロゲルギスト同人としても活躍された物理学者の高橋秀俊先生や確率論の丸山儀四郎先生などもおられるが、本シリーズの登場人物として欠かせないお名前は茅野健氏である。茅野さんは当時は電電公社の通研におられたが、後に松下通工の専務となられた。その間を通じて、日科技連か日本規格協会で研究会を主催され、企業の人たちの生の問題に対してOR的アプローチの指針を与えるという活動を続けておられたと聞いた記憶がある。茅野さんはやや甲高い声でさまざまなアイデアを次から次へと口にされていたような気がするので、頼りにされた人達も多かったのではないであろうか。

OR学会設立打ち合わせ会が東京で持たれたのは1956年であるが、その前年の11月に関西では目崎憲司先生を代表理事とする経営科学協会が設立されていた。それで、目崎憲司、横山保、水谷一雄の諸先生を含む主要メンバーと協議の上、同協会を包含する形で1957年に日本オペレーションズ・リサーチ学会が発足したのである。目崎先生はもともと大学で活躍してこられた方と伺っているが、応用を非常に重視された方で、研究発表会のプログラムが「待ち行列」、「線形計画」というような方法別に組み立てられていることにご不満で、当時の担当幹事はこの点についておしか

りを受けたものだ。

OR学会誌は「経営科学」の名を引き継いだため、1957年に発行された最初の号数は第2巻となっている。OR学会設立準備の事務室は、東京工大の河田研究室に置かれたが、当時助手として同研究室におられた渡辺浩先生が実務をこなして学会発足にこぎ着けた。学会発足時の57年度からの3年間と少し休んで62年度からの3年間、都合6年の長きにわたり庶務幹事を務められて学会運営の基礎を築かれた功績は大きい。

渡辺先生は日科技連に開設されたOR教育コースや軽井沢ORセミナーの講師を務められたり、OR研究懇話会に参加されたり、初期のOR普及活動の中心の1人として活動をされた方であるが、後年は東北大学と筑波大学の教授として学生の育成にも当たられた。現在筑波大学の犬塚キャンパスに設置されている社会人大学院の経営システム学専攻は、渡辺先生の発想が基になっていると聞いている。渡辺先生は音楽の造詣が深く作曲まで手がけられるほどの多才な方である。

上記「年表」によると、1954年に7社を集めて「鉱山業OR委員会」が設置されたが、その中心人物は奥村誠次郎氏で、学会発足時の理事や監事も務められた。またこの委員会のリーダー役を長年務められたのは宮沢光一先生で、学会発足当初には刊行物理事を近藤先生から引き継いで学会誌の充実に努められた。

増山元三郎先生は実験計画法を始めとする推測統計学のご研究と普及で名高いが、デミング賞の第1回受賞者で、QC発展の基礎作りに貢献されたことでも知られている。増山先生の百科事典的博識さは大変なもので、しばらく滞在されていたノースカロライナの日本人会には、その地の草花についての詳細な記録や、本格的なインド風カレーの料理法を伝授されたというエピソードが残っていた。

増山先生はロシア語にも通じておられ、しばしばナウカ書店に赴かれていたようであるが、後年森村が翻訳したヒンチンの「待ち合わせ理論入門」の原本は増山先生がご購入になったものである。後に、先生の主催されていた日本規格協会の研究会で、この本をテキストにゼミをされるなどORの分野にも広く関心を持たれており、60年代始めには学会理事や副会長も務められている。

ORの黎明期から活躍してこられた方としては、関根智明(ともはる)先生も忘れるわけにはいかない。東大出版会、中央大学をへて慶應大学の管理工学科に長くおられたが、それこそ一匹狼としてもっぱら学習

にいそ生まれ、あえて学位も取得されず、後輩の育成にあたっておられた。関根先生は多くの学術書を翻訳されたが、増山先生同様ロシア語も堪能で、ポントリヤーギン「最適制御の理論」もそのうちの一冊である。独特のストレートすぎるともいえる発言から逸話には事欠かないが、日本の品質管理、TQCの偉大な先駆者で、QCサークル活動の生みの親といわれている石川馨先生との間に交わされた禅問答は伝説的である。石川先生の「ORとは何だ？」という問いに対して、関根先生は白い紙を一枚とりだして、「これだ！」と

答えられた。すべてを全くのゼロから始めるべきだとする関根流の考え方を示されたのだ。

参考文献

- [1] OR事典編集委員会編、『OR事典初版』, 日科技連, 1975 (日本OR学会の歴史(1942~1975年度)は<http://www.orsj.or.jp/~wiki/shiryou/3.html>に再録).
- [2] 後藤正夫, あるORの体験, オペレーションズ・リサーチ, Vol. 34, No. 2, 1989.